時をかけるミス助手

狩人二乗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時をかけるミス助手

【Ｎコード】
Ｎ６８４６Ｎ

【作者名】
狩人二乗

【あらすじ】
未来にも過去にも行けるタイムマシーンを開発した博士が私に課した命令は、『博士が患っている不治の病を治す方法を探し出す』こと。色々ともやもやした状態で、それでも私は博士の命令通りに未来へ行きましたが、そこは私の想像した輝かしい場所ではありませんでした。そして、そこには小さな男の子が一人、佇んでいたのです。

1

「ちょっとだけ未来に行ってきてくれないか」
今にも死にそうな顔で、博士はそう私に言いました。そうです、まさしく意味もわからないことです。ああ、何だか私も何を考えているのかわからなくなってきました。今の今まで博士はいつも通り横になって液晶テレビに映る女優のほくろの数を数えるという愚行を行っていたのに、いきなりの未来超越してこいや宣言。命令と言った方がいいかもしれません。とにもかくにも博士は液晶テレビの電源をリモコンで消し、お昼に毎回食べることになっているカプセル状の薬をお水を媒介に二つ飲み込んだ後、「そろそろ限界かもしれないな」と私に向かって言ったのです。
「はい？」当然私は惚けた声を出します。「何を言ってるんですか、博士？　とうとうぼけちゃいましたか」
「失礼な。誰がぼけるか誰が。これでもまだまだ現役だっての」
「では、何故私に未来へ行けなどと訳のわからないことを言うんですか？」
「わからないのか。政界や科学の世界を揺るがす一人の偉大な博士が、死ぬかもしれないと悟った。しかし死にたくない。まだ研究したいことが山ほどある。これらの状況が目の前に提示されているんだぞ」
「すいません、わかりません」
「考えたことをそのまま口にしてみろ。そうすれば自ずと答えは出てくる」
「はあ……」言われて私は考えますが、どうにもこうにも思い付きません。まず、博士が言った、政界や科学の世界を揺るがす博士という人が周りに居ません。それから、好きな女優のスリーサイズを目算で計算しつくす博士なら目の前に居ますが、研究したいことが山ほどある博士は周りには居ません。このような状態で一体全体ど

のようにして答えを出せと言うのでしょう。私には不可能なことです。しかし博士は考えたことをそのまま口にしてみろと言っています。些か上から目線でへどが出ますが、これも寝たきりの博士の為。未来に行く云々は置いておいて、博士の質問に答えるくらいなら私の人生のほんの少しをいけにえにする価値があるかもしれません。なので間違えることを覚悟し、潔く考えたままのことを言うことにしました。

「素人考えで恐縮なのですが、もしかして未来の治療法を持ち帰って病を治したい、とその博士は思っているのではないのでしょうか」

「おお、正解……ってその博士とはどういう意味だ。目の前にいる私だ。私がそう思っているんだ」

「調子こかないで下さいこの白髪野郎」

「え、は？　今なんて言った？　物凄く辛辣なこと言われた気がするんだが」

「辛辣なのは博士そのものです」全く、博士と喋っていると話が先に進みません。憤慨に思いながらも、私は博士に話し続けます。「とにかく、私を未来に行かせるなんてこと駄目に決まっています。いくら博士が未来にも過去にも行ける、猫型ロボットも青ざめる程の性能を誇るタイムマシーン開発者だとしても、それはいけません」

「あの猫型ロボットは最初から青ざめていたと思うのだが」

「最初は黄色ですよ。好きになったメスにケツふりまくった結果青くなったんです」

「その言い方は全国民からひんしゅくを買うから止めたまえ」

何でこんなこと言う娘になったんだろうなこの助手は、と溜息をつき、そして咳をはく博士。ゴホゴホゴッホと、有名画家の名前を言うかの勢いで咳を吐いています。急いで私が側に置いてあった水入りのコップを持っていこうとすると、「いや、いい。それよりもタオルを持ってきてくれ」と博士は口を右手でおさえながら言いました。博士の口からは赤い液体が出ていて、それによって私が洗った白いお布団や博士が着ている水玉模様のパジャマに赤い模様が。

血。血です。博士の口、から、血、が。今までこんなことはありませんでした。思わず、「ひゃんっ」という声を出してしまう私。血は駄目なのです。深夜アニメに出てくる男性視聴者を狙い過ぎてる媚び媚び巨乳星人より駄目なのです。

「す、すまない。鼻血ではないからな。勘違いしないでくれ」慌てて持ってきたハンカチを手にとりながら、誰も責めていない部分を取り繕うとする博士。グーパンチ略してグーパンをしたいという欲求が生まれましたが、寸手の所で我慢した私。偉いです。博士より偉いです。拍手喝采をお願いします。

というような、冗談はさておき。

博士は、今までで一番危ない状態に居ます。危篤、とでもいうのでしょうか。今までにも、深夜にパソコンの液晶画面を見すぎたせいで鼻から血を出したり、目が充血していたりはしていましたが、まさか口から血をはくなんて。

「ゴホッ」「ひゃー、博士っ」

タオルでおさえている筈の口からはまだまだ血が出ています。よだれが押し出される勢いです。いえ、今の博士にとっては血がよだれなのでしょう。農家の方々が精魂込めて作ってくださったお米に含まれる成分を、血で分解する人間、それが博士なのです。まさしくニュー博士。略してニュ博士です。

「大丈夫ですか、ニュ博士っ」

「ニュ博士とは何だニュ博士とは」寧ろ君が大丈夫かと困惑しながら、私に真剣な表情を向けます。「昔患った不治の病。若い頃はなんともなかったのだが、どうやらここにきて本格化してきたらしい。二十年後とか三十年後とか、そこらへんの未来に行ってくれ。そうすれば私の命は助かる筈だから」

「博士。それはいけないことではないのですか」そう言いながら真剣な表情をする私。「未来に行くということは則ちこれから起こるかもしれない事象を先回りして知ることだ、と博士がノーベル賞を受賞した時博士自身が言っていたではないですか」

輝かしいスポットライトの光りに照らされながら笑う博士の姿を思い浮かべながら、私は博士に問い質しました。今思い出すとあの時の博士は滑稽な姿をしていたように思えます。皺くちゃな顔に白髪に黒いタキシードという不具合な程不釣り合いなあの姿。私はその博士の姿が哀れに思えて泣いたのです。決して、長年研究してきたことが世の皆様方に認められて嬉しいからではありません。私しか知らない博士の凄い所を、世の皆様方も知ってしまったことに対して泣いた訳ではないのです。

「いや、それとこれとは別だ」すると博士は、これまた真剣な表情で私の目を見ます。ですがその顔は、何かに対して言い訳をしようとしている風でもありました。「……いや、違うな。確かに君の言う通りだ。反論が思い付かない。私は私の私利私欲の為だけに君を未来に行かせようとしている。言い訳のしようもない。だが、まだなんだ、私にはまだ研究したいことが山ほどある！　ドラゴンとやらに会ってみたい、この世の何処かにあるといわれる『ヒーローがいるのに平和な街』とやらにも行ってみたい、瞬間移動もしたい、タケコプターもつくりたい、昔出会った美人なお姉さんと再会したい！」

「最後の欲求に対して私は拒否権を行使したいと思います」

「君は何様だ、君は」とにかく、と一息つくと、博士はパジャマの左胸ポケットから銀色の鍵を取り出し私の前に差し出しました。「私は本気だ。私は私の為、君を使い未来の情報を得ようと思う。マスコミが騒ぐだろうな。私の好感度はがくんと下がるだろう。だがそんなことは知ったことではない！　やーいやーい悔しいならお前らもタイムマシン造ってみろー！　という訳で、さあ助手よ！　バックトゥザフューチャーだ！　行ってこい！」

「嫌です」

「ここまで引っ張ってもまだ君は拒否権を行使するのか！」

何故君はそこまで未来に行きたがらないんだ、と怒った様に叫ぶ博士。まあ怖い。これこそ世の奥様方がいうドメスティックバイオ

レンスとやらでしょう。何も悪いことを言ってない私に対し、罵声を吐き捨てる博士。最悪です。逮捕ものです。何故博士はそこまで未来に行きたいのでしょうか、と考えたところで、ああそうか博士は生き永らえる為に未来へ行こうとしているんだ、と思い出した私。わかります。博士も博士なりに真剣なのはわかります。ですが、やはり自分の未来の為だけに私を未来に行かせるのはどうなんだろう、と私は思うのです。私のような平々凡々な女が未来に行ったとして、そこで必ず治療法を手に入れることが出来るかどうかもわかりません。それどころか、何か手違いをおかして現代の世界をぐちゃぐちゃにしてしまう可能性もあるのです。大事なところでドジをする女、それこそ私なのです。フジコちゃんもビックリな程です。ほらルパぁン、と誘惑している最中に銭形警部が来る状況を作り出す程のドジっぷりを発揮するのが私なのです。「だから駄目です、博士。私が未来に行ったら、またつまらぬ物を斬ってしまったと言いながらゴエモンがこんにゃくを斬ってしまいます」

「何の話だそれは！　一体全体、君は私に何を言いたいんだ」

「私はドジっ娘だということを言いたいのです」

「どれほどのドジをおかせば侍にこんにゃくを斬らせることが出来るのだ！　ええい、もういい！　ドジっ娘アピールなど勝手にやっていろ。とにかく、今すぐ未来に行ってこい」

これは命令だ、助手よ。

最期にそう言って、博士は死にました。目を閉じて、ぱたりと倒れるその死に際はなんとも呆気なく、私の頬に涙が流れることは一切合切ありませんでした。畜生。私のドジっ娘アピールを無下に扱いやがって。怒りが私の頭を蹂躙します。へっ、清々したぜ。口に出かけた言葉を胸の内に押さえ込む私。ふう、危うく私のキャラを壊すところでした。読者の皆様、私はエンジェルです。ドジっ娘ナースならぬドジっ娘エンジェルです。あなた方の未来をエスコートする万能エンジェル。花咲か天使並の活躍を見せてあげましょう。なのでどうかお見知りおきを。

「博士」エンジェルな私がエンジェルっぽく微笑み、博士の耳の中に囁きます。「どうか地獄で私の帰りを待っていて下さい」
「地獄行き決定かね私は！」
「あれ、生きてた」
「死なぬよ、まだ死なぬよ死なないよ！」
ただ単に睡魔に襲われただけだと言い張る迷惑な白髪博士の耳にかじりつき、「あんまり思わせぶりなことをしないでください。泣いちゃいますから私」とカミカミしながら博士にご忠告。それに対し、「泣くどころか地獄に落とそうとしたじゃないか君は」と青ざめた顔を更に青ざめて呟く博士。ツイートなう状態です。博士、機嫌損なう。私、博士への尊敬損なう。
「何はともあれ」　博士に別れを告げ、暗い研究室を歩き出す私。博士の命令は絶対なのです。ぶつくさ私が言った所で、博士の意見を覆すことが出来るなど有り得ないのです。ああ悲しきなか私の無力。エンジェルが白髪に負ける瞬間です。虚しいかなエンジェルの力。
ああそういえば。今更ながらですいませんが、この研究室は地下にあるのです。うっすらと青いコンクリートで囲まれた研究室。窓もなければ風も通りません。匂うのは薬品の香りばかり。暗い研究室を照らす蛍光灯も壊れかけ。博士はわかっているのでしょうか。もう、博士には研究費が殆ど残っていないということを。思えば博士がタイムマシンを造りだしてから十年が経ちました。そのすぐ後に、博士は病により倒れました。以後、博士は研究をせずに、女優の顔のほくろばかり観ていました。研究対象が科学からほくろに代わった博士のあの姿は、かの有名な真っ白になったボクサーと少しだけ似ていました。ほんの、ほんの少しだけですが。
そうこう思い悩んでいる内にタイムマシンへと辿り着いた私。研究室の隅の方にあるタイムマシンは、以前見た時よりも埃が被っていました。それもその筈。私はタイムマシンというのがあまり好きではないのです。これが博士の知名度を高め、博士宛ての女性のラ

ブレターを遠方からかき集めたと思うと、とてもとても平常心を保ってはいられません。若い女性からのラブレターを読み、ニコニコ微笑む博士を鈍器で殴ったのはまた別な話です。ニコニコ動画でも観ていればいいのです、あんな博士は。ユーチューブは観させません。

タイムマシンはドアの向こうにあります。木製の長方形のドアに、ドアノブ。まさしく青色タヌキロボットが住む家の扉にそっくりです。博士が何を思ってこのデザインにしたのかは見当も尽きませんが、私はドアノブに鍵を差し込み中に入りました。扉を開いた先にある公衆電話ボックス並の小さな部屋の中には何もありません。手をのばせば簡単に届く低い天井に設置された、重々しい機械だけを除けば。

タイムマシーン。

博士の唯一の発明品です。マシンなのかマシーンなのか、今更ながらよくわかりませんが。私は罪な女。古来より培った言語すら捩曲げてしまうのです。卑弥呼もビックリ、樋口一葉もビックリです。思わずにやけ顔になった私ですが、この顔のままバックトゥザフューチャーはまずいので、気を引き締めてタイムマシンに行き先を入力します。

「二十年後、未来、っと」呟きながら私はタイムマシーンに入力をし、決定ボタンを押しました。え？　そんな軽々しい描写ではタイムマシンがどんな外見をしているかわからない？　すいませんが、それは神のみぞしるということでお願いします。タイムマシーンなんてどんな形してるかわかったもんじゃねーんだよ、という作者の心中をお察しください。書けるかそんなの。思い描けるかそんなの。描写力がないんだ描写力が。悲しい。

「同じように、『今までの情景描写もわかりにくい』という指摘もお控え願います」

エレベーターガール並の笑顔の仮面を纏い、誰彼問わず言う私。この笑顔を見れば、寛大なる読者様方ならきっと寛容に私ならびに

作者を許してくれると思います。辛口感想板が怖い。ここらで一杯、お茶が怖い。

私がくだらないことを考えている内に、頭上のタイムマシーンから電気が流れ出てきました。バリバリビリビリと、まるで私を虎視眈々と狙っているかの様です。次第にその音も発電の量も大きくなっていき、部屋を包み込みました。視界が真っ白になります。ピリピリとした感覚が私の体を通り、とうとう私の意識はそこで一瞬途切れました。

再び目を開けると、私は相も変わらず公衆電話ボックスのような大きさの部屋に立っていました。電気が流れた筈なのに、着ている白衣は全く焼け焦げていませんし、私の体はどこも傷ついていません。寧ろ肩こりが治りました。これこそが科学の力、というべきなのでしょうか。恐るべき、です。貼るはサロンパス、というあの有名なＣＭも不要と化します。凄いです、タイムマシーン。凄いです、博士。

肩こりが治ったことは嬉しいのですが、しかしここが本当に未来なのかどうかがわかりません。見渡すとドアノブが見付かりました。けれどもこれが未来のものなのか、見当が尽きません。残念ながら扉を開けて、その先にある光景を目にしないことには未来に来たかどうか理解出来ないようです。手間隙かかります。だから博士は駄目なのです。肩こりを治すくらいにしか役立ちません。

憤慨に思いつつも、私はドアノブに手をかけました。この扉の先にはどんな光景が広がっているのでしょう。髪型を馬鹿にされると怒るクレイジーダイアモンドな男性と、だが断ると一回だけ言っていた漫画家さんが戦っているのでしょうか。三人のハンター志望者に向けて、お祖母さんがドキドキ二択クーイズ、と大声で言っているのでしょうか。正直、楽しみです。ワクワクドキドキです。略し

てワクドキです。若者言葉を容赦なく扱う妙齢のエンジェル、それが私です。

「えいっ」そうこう思い描き、やがて覚悟を決めると、私はドアノブを回して扉を開けました。「え？」

そこには。

ゴミというゴミが、散開していました。

サッカーが出来そうなくらいの大きさの研究室に、ありとあらゆるゴミが広がっているのです。冷蔵庫や本棚といった大型のゴミから、林檎の芯やボールペンといった小型のゴミまで、それぞれビニール袋にも入ってない剥き出しの状態で無造作に放置されています。歩けるスペースが少ししかありません。幸運にもタイムマシンの扉の近くにはゴミがあまり無かった為簡単に扉は開きましたが、それでま数歩先にはゴミがあります。生ゴミ不燃ゴミ粗大ゴミ。ゴミが。大量のゴミが、研究室を占領しているのです。

「そん、な」呆気にとられながら私は呟きます。「これが、未来なんですか。私と博士の、未来なんですか？」

私はタイムマシーンが嫌いでした。タイムマシーンのせいで遠方より博士へのラブレターが届き、そのラブレターを読んで横になりながら博士がにやにやしている姿を目撃してしまったからです。博士は好きです。ラブではなくライクの意味で。しかし博士の造ったタイムマシンは嫌いです。だから、私は今まで未来に来たことがありませんでした。

なので、こんな情景を見ることになるとは想定外だったのです。

「嘘、ですよね」

誰に言うでもなく問う私。ここは二十年後の未来。確証に至る証拠はありませんが、少なくともこの研究室の中央のベッドの上で横たわる博士が居ない時点で、ここは現代ではありません。つまりは未来。二十年後の未来なのです。

「……」扉を閉め、沈黙の状態のまま私は歩きます。生ゴミやら不燃ゴミやらの感触が足を伝いますが、関係ありません。ツン、

と鼻をつく臭い匂いがしますが関係ありません。額からはいつの間にか汗が流れていました。私は、歩いているより他にすることが見付かりませんでした。そうでもしていないと、今にも叫び出してしまいそうだったからです。

輝かしい未来が待っている。

そんなのは、私の妄想であり、虚構でした。フィクションでした。実在の人物団体とは一切関係がありませんでした。「私の目の前には、ゴミしか広がっていません。輝かしい未来などないのです。博士を治す治療法など、ありはしないのです」

「そ、そんな悲しいことを言わないでください」

声が。

男の子の、声変わりをする前の男の子の声が聞こえてきました。

「お姉さんは誰ですか。僕の秘密の場所に、どうやって入って来たんですか。そこらへんも含めて、お姉さんが絶望する理由を教えて下さい」

「貴方に話しても何の解決にもならないと思います。私の悩みは、それ程までに深いことなのです」

「確かに、僕は何の解決策も持っていないかもしれません」ボサボサの髪を持つ小さな男の子は、ゴミの上に立ちながら、笑顔でこう言いました。「でも、僕に話すことによってお姉さんの心が少しだけでも楽になるのなら、話す価値はあるんじゃないですか？」

男の子は、一点の曇りもない笑顔で私に言いました。思いがけない絶望にうちひしがれていた私は、男の子の言葉に思わず涙を流していたのです。

2

「お姉さんは何処から来たんですか？」
突然泣き出した私にあたふたとした男の子でしたが、私がゆっくりと深呼吸をして平常心を少しだけ取り戻す様子を見るなりほっとし、そしてゆっくりと私に語りかけてきました。男の子の疑問に対し、未来から来ました、と言えればどれだけ楽でしょうか。しかし私は言えません。何故なら簡単に未来から来たなどと言った場合、この男の子の運命が変わってしまうかもしれないからです。この時代にはタイムマシンが間違いなくあります。ですが私は本来ならばこの時代に受け入れられない人間。過去から来たとは言わず、どこか遠くの国から来たとか言えばいい。ノーベル賞を受賞した時の博士の言葉です。私はそれを胸中で何度も繰り返し、横になった冷蔵庫に座りながら、同じく横になった本棚に座る私の真正面という位置にいる男の子に話します。「えー、まず、私はエンジェルです」
「いきなり何ですか！」私の発言を聞いて、大声を出しながら立ち上がる男の子。駄目ですね。もう少し落ち着いて聞いてくれないと話が進みません。少し博士と似ています。まあ、博士の方が、あれですけど。
「静かに聞いて下さい。そうすれば自ずと私が何者なのかを知ることが出来ますから」
「いや、でも、最初っから天使宣言されて静かに聞けっていうのも無理があると思うんですけど」
「天使ではなくエンジェルです。間違えのないように」
「そこはどうでもいいでしょうよ！」
「はー。そうですか、エンジェル差別ですか貴方。酷いですね。全国のエンジェルに謝って下さい」
「エンジェル差別ってどういうことですか！　エンジェルが全国に散らばってるってヤバイでしょうそんな世の中！」そんなことはど

うでもいいんです、と頭を掻きむしりながら私に怒鳴る男の子。「お姉さんは何処の誰さんなんですか！　それだけ教えてください」
「だから言ったでしょう。私はエンジェ」
「突き通すんですかそれ！ふざけてないでちゃんと話して下さい！」
「ふざけてなどいませんよ！」
「逆ギレですか！」
「違います。正当ギレです。貴方が逆ギレです。これだから近頃の若者は。信じられません。……土下座しながら回ってワン、と言ったのなら今なら許してあげますよ」
「身体の構造上それは不可能ですし寧ろ僕はお姉さんにやってもらいたいんですけど！」
「ワン」
「出来ちゃった！」
　それから私と男の子はワーワーギャーギャーと互いに罵りあっていたのですが、割愛させてもらいます。あまりにも見苦しかったのです。命ごいをするラスボスの如く見苦しかったのです。例えるならばクッパですね。何度も婦女誘拐を繰り返し、その度に髭を生やした配管工事の中年に負けているにも関わらず、最後の最後で逃げのびるあの見苦しさ。そろそろワリオかワルイージとかに悪役を交代していい時期かと思います。マリオとルイージの悪いバージョンがワリオとワルイージなのですから。
　と、いう訳で。男の子から「自分をエンジェルとか言うのは止めて下さい」と忠告されたので、本当ははらわたが煮え繰り返って煮え繰り返って大人げなくボディーブローをくらわしてやろうと考えたのですが、そこは流石ドジっ娘エンジェル私。冷静に自分の感情の高ぶりを沈め、「チッ、わかりました」と言うことに成功しました。「舌打ちですか」と言いながらため息をつく男の子。年上の妙齢の女性に対しため息はどうなんですかとこれまた憤慨に思いましたが、けれどもその後、顔をあげて私の言葉を待つ男の子の様子を見る限りただの男の子ではないことが容易に読み取ることができま

した。恐らくは金持ちのお坊ちゃまでしょう。改めて全身を眺めてみると、確かに髪はボサボサで黒いブロッコリーのような雰囲気を醸し出していましたが、服装は至ってまともです。二十年後の未来において一般の男の子がどんな服を着ているかは予想できませんが、革靴を履き、葬式にでも行くかのような正装を着ている男の子が貧乏な訳がありません。

ですが、何故、金持ちのお坊ちゃま男の子が研究室に出入りしているのでしょうか。更にここは、あまり認めたくはありませんが、完全なるゴミ屋敷です。木津タネさんという残念な名前の人が一年間過ごしたらこうなる、とでも表現出来る程の汚さです。木津タネ。キッタネ。きったねー。そんな名前の人がいたらビックリです。木津千里と書いてキツチリと読ませればいいのに。木津千里。キツチリ。きっちり。素晴らしい名前ですね。私みたいなドジっ娘には羨ましい名前です。名は体を表すと言いますし、やはり私がドジっ娘エンジェルという名前だからドジっ娘エンジェルなのでしょう。因みに苗字がドジっ娘で、名前がエンジェルです。私を街中で見かけた時は、迷わず「おーい、エンジェルー」と名前で呼んで下さい。その際訪れる第三者の冷たい目線は、私の名前を呼んだあなた方に降り注がれているのでご注意を。

「私は、遠い国からとある病気の治療法を探しにやってきました」少しの脚色を加えて、真実を言う私。本来ならばここで男の子にでも道案内してもらい病院にでも行けたらよかったのです。「ですが、私はゴミ屋敷の歴史を辿る仕事も兼任しています」

「ゴミ屋敷の歴史を辿る、といいますと、先ほどお姉さんがうなだれていたことに対する理由がそれですか？」

「そ、そうです。これ程までに散乱しているゴミを私は見たことがありません」泣きまねをしながら掠れた声で私は男の子に言います。実際は全く違いますが、勝手に勘違いをしてくれるなら好都合。背後に天使と悪魔がいた場合、迷わず悪魔を手にとるのが私というエンジェルなのです。「突然この一室に侵入したことは謝ります。そ

の上で恐縮なんですが、もしよかったら何故この一室がこのような惨状になったのか。そして、何故貴方はこのようなゴミ屋敷に来ているのか。これらの理由を教えてくれませんか？」

嘘ばかりをついている私なのですが、仕方がありません。ここより二十年前の現代では、今も尚博士は苦しんでいます。危篤状態が続いているのです。私のバックトゥザフューチャーの前のあの押し問答から察するにまだまだ死ぬことはないでしょうが、少しでも早く帰った方がいいのは間違いありませ。全ての責任が私の手に。博士の命が私の手に。しかし、私と博士が住む研究室が何故このようなゴミ屋敷になったのかも聞き出さなければなりません。それならば、嘘をついてでも、一刻も早く理由を聞き出し、病院へ行って治療法を聞かなければ。博士の病を治せる方法が、二十年後に確立されているかもわかりませんし。早く、早く。とにかく早くです。ここから先はコメディーパート一切無しです。コメディーを目当てに読んでいる読者様は、ここらへんで退散した方がいいかもしれません。あ、私をいつまでも眺めていたいという方はどうぞ座布団を敷いてくつろいで下さい。ここらで一つ、饅頭が怖い。ここらで一人、私が怖い。

「あれ？」くだらないことを考えていると、今にも話し出しそうな男の子を横目に私は気付いてしまいました。

博士が造ったタイムマシーンは未来にも過去にも行けます。

ということは、私がこの場所でどれだけ喋っても、喋っている最中に博士が死んでしまったとしても、それより前の過去に行けば万事オッケーなのではないでしょうか。

つまり。

ここでどれだけの時間をかけても、治療法さえ手に入れれば博士を助けられるということ――。

「あ、あの、話をしてもいいでしょうか」

私の顔色を伺いながらしどろもどろになる男の子。やはりこの男の子はしっかりしています。

「はい」男の子の説明がどれほどの時間に及ぶかわかりませんが、得られる情報は全て得た方が良さそうです。「ゆっくりでいいので、お願いします」

わかりました、と男の子は言うと再び本棚に座り、話し始めました。その話は並大抵では信じられなく、更にどうあがいてもこの未来が変えられないことを示していました。

何故なら、男の子が一言、「すいませんが、僕もここが何故こうなったかはわかりません」と言ったからです。私は思います。おいおいだったら今までの私の心中での押し問答は一体全体何の意味があったのだと。ということは、これ以上この男の子と喋っていても何も情報は得られないということになります。それならば、博士の病を治す治療法を探した方に専念した方がいいでしょう。男の子が、「僕がこの場所を見つけたのはつい最近のことです。その頃から、ここはこんなにもゴミが大量にありました」と言ったとしても、です。え？　つまり、私と博士の研究室はかなり前からこのような状態になっていた、ということになるんですか？　――などということはどうでもいいのです。例え、頭の中を博士と私のほほえましい生活風景が流れたとしても。朝食のパンをトーストで焼いている最中に、博士が消え、私が消え、研究室にゴミの山が流れ込まれる情景が頭の中に流れたとしても。いいのです。どうでもいいのです。

「お、お姉さん」ふと気が付くと、男の子がまたあたふたとしていました。それもその筈。私はまた、知らず知らずの内に泣いていたのです。何ですかこれは。何で、こんなに簡単に、涙が目から溢れ出るのですか。止めようにもゴミ屋敷が視界に入り、博士の笑顔が頭に浮かんで、涙はより一層出てきました。わかっています。ここでただただ泣いていても何も変わらないことはわかっています。ですが、それでも、涙が止まらないのです。

「お姉さん」男の子の意思が篭ったしっかりとした声につられて顔をあげると、そこには白い四つ折のハンカチを私に差し出しながら真剣な表情をする男の子がいました。「話したくないことかなと思

ってさっきはスルーしたんですけど。……ゴミ屋敷の歴史を辿る仕事なんてありませんよね？　お姉さんが何故悲しむのか。本当の理由を、教えてくれませんか」

「……」沈黙に陥る私。男の子は、見ず知らずの泣き虫女性に対し、これ程までの好待遇をしてくれます。この男の子になら、私が何を理由に悲しんでいるのか、言っても良いかもしれません。勿論、タイムマシーン云々は喋らずに。また嘘を重ねることになりますが、この男の子ならきっと許してくれます。そうに違いません。

「私は、昔、ここで住んでいたんです。博士と呼ばれる男の人と一緒に。毎日が楽しかったのですが、博士の病状が悪化してここを離れてしまいまして。それで、久々に来たら、何故だかゴミ屋敷になっていたのです。何でですか！　何で、私と博士の住む場所が、ゴミで埋もれているんですか！　何で、何で！」感情に身を任せて叫び続ける私。目から流れる涙は少しずつおさまってきていますが、それでもまだ止まりません。私は叫び続けました。男の子の困ったような表情を横目に、叫び続けました。嘘も方便とはまさしくこのことでしょう。先刻から私は嘘ばかりついています。その嘘に乗じて、涙を流し、叫んでいるのです。元研究室に私の叫びが響き渡ります。主人公に対して涙ながらに『助けて……』と言った海賊専門の泥棒猫よりもよっぽどたちが悪いですが、仕方がないのです。誰とはいいませんが、どうか何卒許してください。ジーザス。ガクトさんの名曲です。

「ハァ、ハァ」息も絶え絶えになり、疑問の波を自身の体より吐き出すことに成功しました。男の子が心配そうに、「だ、大丈夫ですか？」と聞いてきます。私は、「はい。大丈夫です。ありがとうございました」と本心からの御礼を言いました。本心らの御礼。久しぶりですね。博士と一緒に住んでいると、そんなことを言うシチュエーションが無いので困ります。やれ洗濯しろ、やれ食事を作れ、やれ一緒に映画を観ろ。そう私に命令する博士が悪いのではありません。命令されながらも、全く研究をしていなくても、博士が私を

捨てないでくれるのが、なにより嬉しい私が悪いのです。「御礼なんていつもしてます。だから私は、本心からの御礼なのか、ぞんざいな御礼なのかの判断がつかないのです」
「お姉さん？　何か言いましたか？」
「い、いえ、何も」しまった、です。どうやら心中で呟いていた筈の言葉が口から出ていたようです。これはいけません。恥ずかしいったらありはしません。私は、男の子の興味をずらす為、こんなことを口にしました。
「気を紛らわす為に、少し私の昔話を聞いて貰えませんか。私と博士の、愛と友情とドメスティックバイオレンスな昔話です」
「その昔話は博士さんが間違いなく逮捕される昔話だと思うんですけど！　え、え、そんな昔話をするのに何でそんなに嬉しそうなんですか！」
「私が、博士にドメスティックバイオレンスを加える昔話だからです」
「しまったこのお姉さんそっち側の人だった！」
うわっちゃあそんなこと言いながらのこの笑顔はマズイですよ、とまたまたオーバーなリアクションをしてくれる男の子。そのリアクションは嬉しいですが、しかし失敬なです。ドメスティックバイオレンス略してドメオレをする私に対してそこまで批判するとは。と、憤慨に思ったところで、ああ違いますこの男の子はドメオレ話をする私の笑顔を批判しているということに気付いた私。まあ、それこそ失敬なです。博士のパジャマを水玉模様オンリーにしたり、博士の玉子焼きにお好み焼きソースをぶちまけたり、博士の秘蔵フォルダの中身を私オンリーにしたりする私のこの高揚を馬鹿にするとは。許すまじです男の子。ああ許さないとも男の子。
「巨人に苦痛の贈り物をっ！」
「うわっ！　いきなり何ですかお姉さん！」
「私の必殺技、イノケンティウスの業火を放つ為の呪文です」
「まさかのイタイ人ですかお姉さん！」

「そんな、いたいけな女神だなんて。照れます」
「誰、も、そんなこと、言ってないです、よ！」足踏みをする男の子。怒りが顔から滲み出ています。怖いです。「もういいですから、とにかくお姉さんの昔話を聞かせて下さい！　少なくともお姉さんの残念な発言よりよっぽどマシな筈ですから！」
「残念な発言とは失礼ですね。十代前半の女性にそんなことを言うなんて、私、悲しいです」
「十代前半ってそれだと僕より年上になってしまう年齢層なんですけど！」
「お兄ちゃーん。……とか呼ばれたいんでしょうどうせ貴方は。ケッ」
「不条理にも僕がひかれる立場に！」
　何はともあれこうして男の子と喋っていても拉致がありません。潔く男の子が悪いことを認め、早々に話を戻すことにしましょう。私は何も悪くありません。何故なら私がエンジェルなドジっ娘だから。「波動は我にあり、この世の全ては私の手の中に！」
「う、うわ……」突然叫んだ私に、今までみたことも無いような冷たい目を向ける男の子。ヤバイですね。どうやら本気でひいているようです。やれやれですね。高尚な私の発言は、どうやらこの男の子には通じないようです。十八禁の女、それが私です。
　男の子の視線の鋭さが本格的になってきたので、「すいません。今から過去話します」「愛と友情とドメスティックバイオレンスの話ですか」「違います。はるな愛とちびまる子ちゃんのトモゾウとカフェオレの話です」「逆に聞きたい！」という会話をし、話すことにしました。
「今は昔、博士ありけり。研究にまじりて生活しつつ、よろづのことに使いけり。名をば、研究室の博士といいける」
「その語り口調だとお姉さんがかぐや姫になってしまうんですけど」
「博士は昔、この一室に、一人で生活していたそうなのです。何でも、タイムマホニャララに使える材料があったとかで」

「タイムマホニャララってそれ、もしかしてタイムマシンですか」
「ち、違います」うおっ、何故ばれたし。やはり凄いですこの男の子。少しのヒントで直ぐに答に結び付けます。は、早く直さないといけません。「あの、その、あれです、タイムマキシマムザホルモンです」
「ぶっ生き返すんですか！」
「そうです。チューチューラブラブ」
「それ以上言ったら駄目です、少なくとも十五禁指定になりますこの会話！」
十五禁指定ですか。ふっふっふ望むところです、と断言したいのですが、残念ながらこの小説は全年齢対象。読者の皆様、安心してください。私達の会話は全年齢対象。私の美しさも全年齢対象です。十八禁の女という響きも魅力的ですが、やはり全年齢の女の方がいいでしょう。下は零才、上は万才までオッケーです。火の鳥の血を飲んで不死身になり、ナメクジだらけの地球を眺める神様まで私に興奮してしまいます。ああ、私ったら罪な女。
「……っと。話が逸れましたね。全く、誰のせいなんでしょうか」
「何ですかその目！　ぼ、僕のせいじゃないですよ絶対！」
「ハンッ。どうだか」
「……」
沈黙状態になる男の子。どうやら全ての非を認めて私の話を聞いてくれる体勢に入ったようです。宜しいですよ男の子。苦しゅうない苦しゅうない。真摯にそれを受け入れ、私も真面目に話したいと思います。
「博士がここに住み着いてから五年。ここに入れる唯一の扉の向こうに、眠った状態の女の子が捨てられていました。女の子の年齢は七歳。名前はエンジェル。立派で聡明で、それはもう大変麗しい女の子だったそうです」
「スルーしますからね、僕。構わず続けてください」
「わかりました」男の子が何故冷たい視線を私に浴びせるのかとい

うことはわかりませんでしたが、男の子の言う通り、構わず話を続けます。「博士はその捨てられた赤ん坊を育てることを決意し、研究の傍ら、アルバイトをしながら女の子を育ててくれました。女の子はそのひたむきな姿に心をうたれ、博士が女の子を拾ってから十年以上、博士の助手をしている訳なのです」

一応、この話に嘘偽りはありません。まあタイムマシーンのくだりは濁してしまいましたが、それでも充分私と博士の過去を話せたと思います。神充です。私の心のもやもやもスッキリしました。こうしてはいられません。さあ、いざ行かん博士の病の治療法奪取へと。

「へー。ということは僕もここにずっと住んだりしたら、女の子が扉の向こうで待ってくれたりするんでしょうか」

「……」すると、私の心意気を一気に意気消沈させる言葉を男の子が吐きました。「何言ってるんですか。冷静になってください。どっかの年中発情白髪みたいな発言は、寿命を縮めますよ」

「いえ、あの、そういうやましい気持ちはないんです」私の指摘に顔を真っ赤にしながら否定する男の子。「ただ、一人で生活するのは寂しいなと思いまして」

「え？　それってどういう――」

「捨てられたんです、僕。両親に」男の子は、涙も何も流さずに、明るい笑顔で言いました。

3

「昔、お母さんとお父さんは仲がいい夫婦だったみたいなんです。新婚旅行は地球一周。家は豪華一軒家。有名財閥の家系のお父さんと普通にお金持ちなお母さんだったので、生活に苦しむこともなく、仲良く暮らしていました。――僕という異分子が、生まれるまでは」

本来ならば僕は産まれる予定の無い子でした。両親に望まれない子供。だけど、両親の親にあたるおばあちゃんとおじいちゃんがお母さんのお腹の中の僕という存在を、知ってしまったのです。

「お母さんは僕を堕胎する訳にはいかなくなりました。重い僕をお腹に宿し、そして僕は産まれたのです」

両親は、笑っていなかったみたいなのです。お母さんは、お父さんは、おばあちゃんとおじいちゃんが家に帰った後、ため息をついたらしいのです。

「それでも、お母さんとお父さんは僕を育ててくれました。僕が病気になっても一生懸命看病してくれました。それが例え、世間様に見放されないようにとった行動だとしても、僕にとってはとても嬉しいことでした。だけど、とうとう僕が見放される時期が来てしまったのです。それが今日なのです」

僕を可愛がってくれたおばあちゃんとおじいちゃんが、母方と父方の四人共が全員、死んでしまったのです。

「僕は、捨てられました。この事実を両親から無表情で伝えられ、綺麗な服と、少しのお金と少しの食べ物をポケットの中に入れられ、捨てられたのです」

「……」

私は。

男の子の話を聞いて、無性に腹がたってきました。こんな、こんなに不条理なことが果たしてあっていいのでしょうか。ふざけるな。叫び倒してしまいたいです。博士を苦しめるだけならまだしも、何

の罪もない無垢な男の子まで苦しめるこの世界というものに対して、叫び倒してしまいたかったのです。お母さん。お父さん。何故男の子を、何故私を捨てたのですか。理由が、理由がある筈。そうに違いないです。こんな、こんな悲しい理由で捨てるなんてあってはならないのです。

無関心。

それだけは、駄目です。駄目なのです。

「ありがとうございます、お姉さん。僕の話なんか聞いてもらってくれて」男の子は涙を流していました。だけど、笑顔でした。私を極力悲しませないようにする為でしょうか。

気付くと、私は男の子を抱きしめていました。温かく、小さな体。男の子は一瞬戸惑った様に私の顔を見上げましたが、私が笑いながら男の子の顔を見ると、私の胸に顔を埋めながら、男の子は泣き始めました。お母さん、お父さん、何で僕を捨てたの。何で僕を見捨てたの。叫び声がゴミ屋敷に響き渡り、泣き声がこだましました。それらはどちらも、二種類が重なった合唱でした。

私は、ずっとこうしていたかったのです。男の子を抱きしめ、男の子が私を抱きしめ、同じような境遇の二人が抱きしめあうこの状況は、とても心地よかったのです。

ですが。

それは、不可能でした。

――突如、私の後方にある部屋から、バリバリという大きな音が聞こえてきたからです。

「え、えっ」男の子が慌てて私から離れます。「お姉さんっ！　お姉さんの体とあの部屋が、光ってるんですけど！」

「そんな、そんなことってありますか！」

何ですかこれは。何でタイムマシーンが作動しているのですか。何でタイムマシンがある部屋から電気がもれ、私の体と同化してい

るのですか。まさか、タイムマシーンの暴走という奴ですか？　それとも故障？　そんな――そんなことってありますか。ふざけないでください。私はまだ博士の病を治す治療法を見つけていません。

「私はまだ、この子と喋っていたいのに！」

「……」

私と同じようにうろたえていた男の子でしたが、私の発言を聞いたからか何なのか。

慌てるのを止め、私にもう一度、静かに抱き着いてきました。「僕は大丈夫です。この先何があるかはわかりませんが、掃除をして、ここで一人で生活します。お姉さんが言っていた、博士と同じように」

男の子の言葉を聞き、私は感極まりました。この男の子はどれだけ優しければ気がすむのでしょう。私よりも何倍も辛い筈なのに、それなのに、私を苦しませないように私を慰める発言をする男の子。体が本格的に光ってきました。目の前が白くなる感覚が私を包みましたが、しかし、私はまだ帰る訳にはいきません。

「私の名前は谷山ななせといいます。貴方の名前を教えてください！」

「え、ぼ、僕の名前は鳥山義弘といいます」

「義弘君！」私は叫びました。義弘君を抱きしめながら、叫びました。「両親のことなんて忘れちゃえばいいんです！　貴方に渡したっていうお金をパーっと使って、貴方に渡したっていう食べ物をパーっと食べて、決別しちゃってください！　大丈夫です！　いつかきっと、生きていればきっと、楽しい未来が待っていますから！」

消えかかる意識の中。

私は義弘君にそう告げて、現代に戻りました。

4

「長いトイレだったな」
「……え？」目を開けると、そこは研究室でした。ゴミ屋敷ではない、普通の研究室。どうやら私は二十年前の現代に帰ることが出来たようです。「え？」
何故私が直立し、タイムマシーンがある部屋に居ないのかは不思議でしたが、それよりも不思議なことがありました。「は、博士？
貴方、博士ですか？」
「ああそうだ。政界を揺るがす程の権力を持つ男、それが私だ」
そのふざけた言葉を聞いて博士だと確信することは出来ました。出来ましたが、ちょっと、というよりかなり、この男の人が博士だと信じられないような出来事が博士の身にふりかかっていました。
博士の髪が、黒髪だったからです。
「博士！　何で髪が黒いんですか！　そ、そういえば体も健康そのものみたいな感じなんですけど！」どういうことなのでしょうか。博士が博士ではないのです。黒髪で、先刻のような死にかけの体ではなく、普通に立って机の上で何かの薬品を扱っていました。水玉模様のパジェマを着ているところが唯一の救いでしょうか。何ということでしょう。博士が、本当にニュ博士になってしまいました。ビフォーアフターです。今はアフターの段階です。アフター過ぎて驚きなのです。
「ん？」私の慌てながらの指摘にゆっくりと答える博士。「何を言っている。昔から私は黒髪で、昔から私はムキムキだっただろう。このムキムキのおかげで歌舞伎町で引っ張り凧だったのは今でも良い思い出だ」
「……今の博士はムキムキではないですし、多分それ騙されてますよ」苦笑しながら私は博士と会話をします。外面は冷静さを気取っていますが、内心では心臓バクバクです。夢を食べる動物が心臓の

横で二体並ぶ状態です。でも、やはり、博士と話していると心が落ち着きます。外見は変わっても、博士は博士のようです。
「な、何を言うか。私程の男を歌舞伎町の女の子達が放っておく筈がない。なあ、そうだろう」
「イケメンですね、博士。歌舞伎町限定ですけど」
「後半は無視だ。前半だけ頭の中で繰り返しておく。いやあ、珍しいなあ。君がそんなにも私を褒めてくれるなんて」
「イケてないメンズですね、博士。歌舞伎町も含めてですけど」
「全面的に否定的な内容になってしまった！」
混乱の渦も、博士と会話をしたおかげで段々と落ち着いてきました。それと同時に冴えてくる私の頭。やはり私はエンジェルです。ドジっ娘アピールをしたいところですが、どうやら私にはドジっ娘ジャンル推進は無理な様です。残念ですが、エンジェル路線を貫き通すことにしましょう。
エンジェルっぽく考える私。まず、博士はタイムマシーンの暴走により戻った私に対し、「トイレ長かったな。大か小か、今すぐここで言いなさい」などという発言をしました。最低です最悪ですセクシャルハラスメントです。略してセクラスです。……惜しいですね。三文字目の『ラ』をラ行に合わせて四つ動かせば、あの言葉になったのに。
まあこんなことはどうでもいいのです。とりあえず、博士のセクラスと言えど、無視をすることは私の議に反します。どんな下級階級の男性でも平等に扱うエンジェル、それが私です。今確実に後光がさしてますね。ああ、気分が良い。「大でも小でもありません。さあ、博士の質問に答えたので、敬ってください」
「何でだろうな。君の言うことが一言も理解出来ないのだが」
「この無知無知博士」
「どうせならムチムチ美女を呼んでこい！」
「はい」言われて、直立不動になる私。「どうぞお好きに」
「……何か、違う」

「何も違いませんよ失礼な」
本、当、に、博士は失礼です。今の言葉、軽く言った感じでしたが心臓バックバックだったんですけれど。二体の夢を食べる動物も帰ってしまいましたよ。私の心臓の横には何もない状態でしたよ。何でですか。何で私の誘惑に引っ掛からないんですか。何で私の助けもなく、元気いっぱいになってるんですか。「不治の病はどうしたんですか。タイムマシーンはどうなったんですか」
「何のことだ。一体全体どうしたんだ、助手よ」
「何で博士は生きてるんですか！」
私の発言に、初めは「酷い！　それはひど過ぎるぞ君！」と叫んだ博士でしたが、いつの間にか泣いていた私を見てあたふたとする博士。またです。また私は、人前で涙を流しています。最近涙を流し過ぎですね、私。反省しなければなりません。
「あー、えー」俯いて泣く私に声をかける博士。その声につられて顔をあげると、そこには真剣な表情をした博士が居ました。「これで涙を拭きなさい」
博士の右手には。
四つ折の白いハンカチがありました。
――デジャヴという言葉を、読者様方はご存知でしょうか。そうです。過去で見た映像が、何らかの映像を見てフラッシュバックするあれのことです。
今体感したデジャヴは、未来で見た映像がフラッシュバックしたという場合なのですが。
「博士」
「何だ」
「博士の名前って、何でしたっけ」
「何を今更。谷山稲瀬だろう。両親と決別する為、苗字も名前も変えて家族になろうと十五年前に誓ったではないか」
「その前は」興奮によって荒ぐ息を整え、冷静に博士に聞きます。
「改名する前の名前。もしよかったら、教えてくれませんか」

「ん。んんん」少し悩むように首を傾げる博士でしたが、私が再び泣くと、慌てたように「わかったわかった。だから泣くな」と言いました。勿論泣き真似です。女の涙は卑怯とよく言われますが、私はそうは思いません。女の涙は凶器。間違ってはない筈です。

やはりトラウマなのでしょうか。博士は深呼吸を二回すると、私にゆっくり言いました。「鳥山義弘、だ」

「……」頭の中がぐるぐると回り始めます。え、え、え。どういうことなのでしょうか。二十年後の未来に居た男の子と、今、目の前にいる博士が同じ名前。これは、一体どういう真実を指し示しているのでしょう。「もしかして、博士って私を養い始めてくれた年の五年前に、エンジェルに会いませんでしたか？」

「エンジェルに会える訳がないだろ。……ああ、でも、自分のことをエンジェルという女の人には会ったな。うん？　それを何で君が知ってるんだ。前に話したことがあったか」

「いえ、何でも、何でもありません」

博士の言葉で確信しました。

私は、図らずもドジっ娘アピールをしてしまったようなのです。白状します。間違いありません。私は間違いなく、時をかけるミスをしました。私が見たゴミ屋敷。あれは研究室がゴミ屋敷になったのではなかったのです。研究室と化す場所が、あのゴミ屋敷だったのです。

「博士。今から、夢で見た荒唐無稽な話をしてもいいですか」博士の目を真正面に見ながら、私は言います。「それに対する博士の意見をお聞かせ下さい」

「よしわかった。話してみろ」こういう時、何の迷いもなく了承してくれるのが博士です。この優しさが、私は大好きなのです。

「とある場所にタイムマシンがありました。私はタイムマシンを使い時空を飛び越え、一人の男の子に出会いました。男の子は、ゴミ屋敷に住むと言い出しました。――こんなシチュエーションに出くわした時、博士はどんな助言を男の子にしてあげますか」

「何だか君の夢、とてつもないデジャヴ感がするのだが」不思議に思うような表情をしつつも、博士は私の言葉を真摯に受け止め返事をしてくれます。「そうだな。私だったら、まずその男の子に掃除をさせよう。そして、そのゴミ屋敷のゴミから研究材料を探しださせるだろうな。タイムマシーン。そうだな、タイムマシーンを研究するのもいいだろう。でもまあその前に、親から貰ったポケットに入っているパンを食べさせるべきだ。腐っていても、食べさせるべきだ。その中に、不治の病を治す、まだ誰も知らない成分が入っているかもしれないからな。もしその男の子が不治の病にかかっていて、それがどんな病状なのか知っている状態ならば尚更だ」

すまないな。途中から私の昔話になってしまった。何を言っているかわからないかもしれないが、私はそのおかげで不治の病を治すことが出来たんだ。「ゴミ屋敷を掃除し、そのパンを研究し、私は政界だけでなく医療の世界を揺るがす博士になったのだから」

博士の言葉を聞き、私は急いで後方にある扉のドアノブを回しました。タイムマシーンがある筈のその部屋は、トイレになっていました。

私は。

博士を救うことが、出来たみたいです。タイムマシーンが暴走したのがその為かどうかはわかりませんが。神様、という存在のおかげなのかもしれません。

「よかった、本当によかったです」私は、いつの間にか博士に抱き着いていました。「よかったです。博士が死なないで、本当に良かったです」

「お、おいおいどうした。私のことが嫌いな君らしくもない」

「な、何を言ってるんですか！　私が博士のことを嫌いになる訳がないじゃないですか！」

「え、そうなのか？　じゃあ、何で君は私に意地悪なことばかり言うんだ」

好きな人につい意地悪をしたくなるから、などとは口が裂けても

言えません。無理です無理ですハズカシスギマス。「うるさいです。は、博士は何で、私みたいな性格がおかしい女と一緒に生活してくれるのですか」
「うん？　それは、あれだ。一人で生活するのは寂しいし、何より今の君は、昔、私の前に現れたお姉さんに似ている」
　というよりか、あのお姉さんそのものな気がするのは私の気のせいか？
　私は博士に力いっぱい抱き着きます。時間が経つにつれ、博士は顔を真っ赤にしていきます。私はそれに気付いていましたが、私も真っ赤になっているのでおあいこです。そして、ゆっくりと博士は私の腰に両手を回してきました。私はより一層力いっぱい博士を抱きしめ、博士を見上げました。誘っているのです。博士を誘っているのです。
「知ってますか、博士。トイレの妖精は、昔、森の妖精だったんですよ」
「いきなり何の話をするんだ君は」
「すいません、博士。これがドジっ娘エンジェルこと私ですから」
「……気のせい、だよな」
「博士」
「何だ」
「博士は、これから何を研究するんですか」
「そうだな」博士は首を少しだけ傾げると、私に言いました。「タイムマシーンでも造ろうかと思っている」

4（後書き）

ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
あとがきです。
前作がアレだったんで、とりあえずコメディを書こう。
そう思って書き始めたのがこの作品です。結果、パロディばかり、馬鹿げた会話ばかり、おかしな登場人物ばかりになりました。いやー楽しかった。久々に暴走出来た感じがします。
一応空想科学祭２０１０参加作品ですが、少し、というかかなり恐縮です。空想科学祭さん側に迷惑かけすぎたので。その一例があのバナーですね。本当にすいません。反省してます。

なにはともあれ、ここまで読んでくださり、ありがとうございました。
（因みにですが、文章作法、誤字脱字以外でこの作品のおかしな部分を指摘してくださった場合、空想科学祭２０１０が終わったら変更したいと思います。前作も同様に）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6846n/

時をかけるミス助手

2010年10月8日13時39分発行